慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ユダヤ的性格
Sub Title	
Author	永橋, 卓介(Nagahashi, Takusuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.21, No.3/4 (1943. 6) ,p.117(397)- 139(419)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430600-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ユダヤ的性格

永橋卓介

うなじこはくして心と耳とに割禮なき者よ。汝らは常に聖靈に逆らふ。その先祖たちのごとく汝らも然り。

使徒行傳七ノ五一

汝等この民に往きて言へ。なんぢら聞きて聞けども悟らず、見て見れども認めず、この民の心は鈍く、耳は聞くに懶く、目は閉ぢたればなり。これ目にて見、耳にて聽き、心にて悟り、飜へりて我に醫さるることなからん爲なり。

使徒行傳二八ノ二六―

ダビデ王とソロモン王、この父子二代の富强榮華は舊約聖書に明らかである。しかし、今聖書をはなれてこれを見れば、ただ地中海世界の掌大の地に於て、僅かにほのかな光芒を放つたに過ぎぬ、といふのが正しいであらう。ユダヤ人の前身イスラエル民族が西南アジアの一角に於て演じた役割は決して見ばえのするものではなかつたし、その文化的活動の如きも眞に貧弱なものであつた。然るに、國土を喪失して既に二千年を經過した(註)今日に至つて、彼等は世界の關心の的となり、ユダヤ人問題は益々かまびすしく論議されるやうになつた。彼等はむしろ、王朝全盛時代よりも現在に於て却つて大きな存在とは

なつたのである。

（註）紀元七〇年のエルサレム陥落を以てパレスチナに於けるユダヤ人の歴史の終末と見るのはあたらない。一三二年着任したローマ總督ルフスの在任時代ハドリアヌス帝は割禮を嚴禁すると共に六十年間荒廢のまゝになつてゐたエルサレムに異教都市「エリア・カピトリナ」を建設し、ヤハエ神殿跡にユピテルの神殿を建てようと計畫した。この頃メシアと自稱するバル・コクバなる人物が現はれ、彼を中心として全民族がこれに對して叛亂を起し全ユダヤを占領した。しかしさしもの叛亂も一三五年に平定され、エレサレムは計畫通り「エリア・カピトリナ」となつてユダヤ人は全部追放、入市を嚴禁された。そして神殿跡の表土は鋤を以てけづりとられ、彼等の希望は全く失はれた。この年こそ彼等が全世界に掌大の國土をも有たぬこととなつた年である。しかしユダヤ人がヂアスポラとなつたのは、勿論この時にはじまるものではなく、既にバビロン虜囚時代からのことであつた。

現在のユダヤ人總數は約一千五百萬で（アメリカ猶太年報・一九三八年）混血は四千萬にのぼると謂はれてゐる。一體このヂアスポラのユダヤ人は國民と謂はれ得るであらうか。國土をもたぬものが國民としての統一體を構成し得るかについては問題もあらうが、彼等が一種の國民であること、特殊國民とも呼ばるべきものであることは、多く認められてゐるところである。國家の滅亡とそれに次ぐ離散とによつて消滅することなく、なほ斯る一種畸形的存在をつづけ得るのは、一にその特殊の性格に基く著しい强靱性によるものである。

反ユダヤ主義（アンチセミチズム）は、思想としても實際運動としても、既にローマ時代から見られ

る。これは近代に至つて政治的にも社會的にも種々の發展をなし、その主張の如きも種々である。反ユダヤ主義について記すことも、それに對するユダヤ人側の反撥について記すのも本文の目的ではないが、要するに古代の人種的・宗教的反感に出發して近代の政治的・社會的・經濟的問題にからまる理論に發展したものと一般に考へられてゐる。グスタフ・スティレは、人種的・宗教的反感に基くものを「感情的反ユダヤ主義」と呼んで、眞のユダヤ人排斥の勇氣と手段とを缺く不徹底なものとなして居り、また今日に於ても民族蔑視的なゆきかたは一般に餘り顧みられてゐない。然しながら、問題の根本がこの邊に伏在してゐることは、如何にしても否み難いのではあるまいか。卑見によれば、ユダヤ人は特殊な性格をもつた民族である。これと比較さるべき民族は存在せぬ。同じセム族に屬する他の民族とも著しく異つてゐる。ここに於て我々は、ユダヤ的性格を抽出して見なければならぬ。

冒頭に掲げられた聖書の句は、いづれも使徒行傳から引かれたもので、前者はステパノ、後者はパウロによる辛辣なユダヤ人批判である。これはどこまでもユダヤ人のユダヤ人批判であつて、基督教に改宗したユダヤ人、或は使徒の言葉ととるべきではない。舊新約を通じて、豫言者や使徒たちによるユダヤ人批判は少くないが、これらは最もよくユダヤ的性格を傳へるものと考へられる。

先づ第一の句を見るに、これはステパノの言葉には違ひないけれど、なほよく見れば太古から行はれて來たものであることがわかる。モーセに率ひられてエジプトを脱出したイスラエル人は、モーセがシ

ナイの山に於て神と交りつつあつた間に、山の下に於て一種の反逆を企てた。その時ヤハエはモーセに向つて、「我この民を觀たり、視よ是は項の强き民なり」と言ひ、彼等の絶滅を約したのである。(一) 故に彼等が頑迷極る民であることは、先づ神の認めたところである。卽ち古來明らかな事實なのである。また無割禮は、神の眞理に對する不從順を意味するもので、心と耳とに割禮なき者とは、神の眞理に對して心と耳とを閉す者の意味である。この言葉も古來言ひふるされたもので、舊約聖書にて一再ならず見られるものである。(二) 故にステパノは、「その先祖たちの如く」と言つたのである。聖靈に逆ふこと、卽ち眞理に逆ふことは、今も昔もかはらずユダヤ人の通幣であるとは聖書の斷言である。

（一）出エジプト記三二ノ九、三三ノ三。

（二）レビ記二六ノ四一。申命記一〇ノ一六。エレミア記六ノ一〇を見よ。

次に第二の句を見るに、ここにも宿命的なユダヤ人の姿が現はれてゐる。この句は本來豫言者イザヤの言葉である。(一) パウロより先に基督自身もこのイザヤの言葉を引用した。(二) イザヤ書によれば、これはヤハエがイザヤをしてイスラエル民族にのべしめようとする言葉である。ここに於てもヤハエはイスラエル民族に失望してゐる。ヤハエの失望は卽ちイザヤの失望であつた。基督もパウロも、どうにかしてユダヤ人を動かさうとし導かうとして結局失敗した末に、この言葉を引用したのである。「顧へりて我に醫さるることなからん爲なり。」とは神と豫言者と使徒との絶望の言葉である。最後の豫言者バプテス

マのヨハネは、ユダヤ人を「蝮の裔」と呼んで、來るべき神の審判の避けがたきことを警告した。然るに、古の豫言者たちを咬み、また後に現はれる基督や使徒たちを咬んだ「蝮」は、却つて一足先にヨハネを審いてしまつたのである。ユダヤ人の害をうけたものは、先づヤハエ、次には敬虔なユダヤ人自身であつたことを忘れてはならぬ。

（一）イザヤ書六ノ九。

（二）マタイ傳一三ノ一四。マルコ傳四ノ一二。ハカ傳八ノ一〇。ヨハネ傳一二ノ四〇。

我々は以上に引いた僅か二つの聖書の句から、正しいユダヤ的性格を抽出することができる。もし「不可教化的」――uneducatable――といふ言葉が許されるなら、それこそユダヤ的性格を一言でつくすところのものである。反ユダヤ主義の最も感情的かつナイーヴなものは、ユダヤ人を劣等民族となすもので、ヴォルテール、ルナン、デューリング、チェンバレン等の主張するところであるが、しかし「不可教化的」とは斯の如きものではない。また屢〻反ユダヤ主義のテーゼに現はれる「虚無主義的」とも異る。單なる「不同化性」でもない。それは實に、「異質的」を意味するものである。未開とか野蠻とか、文明とか開化とかの概念を含まぬ、筋のちがつたもの、もう一つの人間、である。

ユダヤ人はいつの頃かかる性格をうけたものであらうか。一般に、すべてのユダヤ的なるものはバビロン虜囚時代にはじまる、と謂はれてゐる。確かにその時以來イスラエル人はユダヤ人となり、イスラ

エル宗教はユダヤ教となつたと謂はれ得やう。バビロン虜囚が、彼等の歴史上の一大エポックであつて、カナン侵入及び國土喪失と並んで三つの注意すべき時期であることに疑ひはない。しかしながら、「不可教化的」「異質的」とも謂はるべき性格の淵源するところは、なほ一層遙かに遠いのである。卑見によれば、これは遠く遊牧時代に出發するものである。

創世記によればイスラエル民族はノアの三子のうちのセムから出發した。(一)これは今日では學的にも完全に承認されてゐる。(二)卽ちイスラエル民族はセム族の一支派である。それゆゑ、我々は先づセム族に一瞥を與へねばならぬ。

(一) 創世記一〇ノ二一、一一ノ一〇以下。

(二) キルデボーアはこれをインドゲルマン系のコーカサス族から出たものと見てゐるが、一般には承認されてゐない——G. Wildeboer: Die Literatur des A. T, 2 Aufl., s. 7 ff.

セム族の故郷は、今日では大體アラビア沙漠であつたとの說が承認されてゐる。(一)最も早い頃のアラビアは、今日に比較すると幾分か濕ひのある土地で、多くの部族が狩獵によつて生活することも不可能ではなかつたらしく、その記憶は後代の傳說のうちにも殘つてゐる。(二)しかし彼等が移動を開始する遙か以前から、既に遊牧生活に入つてゐたのである。(三)

(一) 理由として擧げられるもののうち注意すべきは、(一)セム族がアラビア沙漠の四周に均齊に分布してゐること、(二)バビロニ

ア、エジプトの古碑文に現はれたアラビアの最も早期の住民がセム族であること、(三)アラビアは不毛の沙漠なるが故に外地への移住を必要としたこと、(四)中央アラビアの今日のベドウイン人が原始セム族の典型であること、などである。

(二) 創世記一九。二五ノ二七。二七ノ三以下。二七ノ三九以下。

(三) 遊牧民を意味する語は Bedawi (pl. Bedu) で、これは農夫(土を耕やす者) Fellāḥîn に對するものである。最も重要な家畜は中央アラビアの單峰駱駝であつた。これなくして彼等の生活は不可能であつた。驢馬、太尾羊、黒毛山羊などがこれにつぐものであつた。

既に土地の所有權が認められるやうになれば、純然たる牧畜生活となるのであるが、すべての土地が共有とされた時代に於ては、一地方に牧草や水のない場合には他の地方に移動するが故に遊牧生活をなすのが普通である。沙漠の遊牧生活に於ては、偶〻出會ふ者はすべて外異者であり敵であつた。他の氏族に對する態度は一樣に敵對的であつて、常に鬪爭が繰返されるのであつた。沙漠生活の基本的律法は「血の復讐」と呼ばれるもので、氏族員の一人が殺された場合に加害者側の氏族の一人を殺して仇を報ひるものである。それは加害者自身である必要はなく、誰れでもよかつた。これは沙漠全體に通用する殆んど唯一の律法であつた。(二) 然るに、沙漠のこの樣な狀態は、「客人不可侵」の原則によつて調整されてゐた。たとひ敵の眞中にあつても、一の天幕に入るか、或はその天幕の綱に手をかけるだけで安全が保證された。客人不可侵或は客人款待の義務は僅〻數日のものではあつたが、一人の客は全氏族の客であつた。(三) これは沙漠全體に通用する唯一の道德であつた。すべてはこの二つのものによつて律せられてゆ

くのが沙漠の社會生活であつた。

（一）ハムラビ法典には「血の復讐」は全く知られてゐないが、古代イスラエル民族の間には知られてゐた。これは古代イスラエル民族の生活を暗示するものである。後代それを取締る試みがなされた（申命記二四ノ一六。民數紀三五ノ一二―三四）。

（二）拙譯・ロバートソン・スミス「セム族の宗教」（岩波文庫版）前篇一〇五頁參照。

荒涼たる沙漠に於て、斯の如き生活をなしつつあつたセム族が一種特別な性格を帶びるに至つたことは勿論自然なことである。セム族が極めて特異の種族であることは多くの學者によつて說明されてゐるが、ヂー・エー・スミスによれば彼等は「矛盾の束」である。第一には、極めて强い肉慾的性質と極めて强い宗教的性質の結合、第二は、驚嘆すべき忍從と發作的獰猛性の結合、第三は、驚くべき緻密な頭腦と獨創力想像力の缺除の結合、等をスミスは擧げてゐる。(註) 正にその通りといふことができやう。これは彼等が歷史の表面に出現する遙か前から受けつつあつた沙漠の教育の結果に外ならぬ。山岳や海洋がそれぞれの民族に與へる大きな影響を我々は知つてゐる。沙漠の與へる影響は、前二者のそれとは著しく異つたものである。

（註）G. A. Smith: The Early Poetry of Israel, The Schweich Lectures, 1910, pp. 33 ff.

我々はセム族の移動と、イスラエル民族の分出誕生等について詳しく敍べる必要を認めない。イスラエル民族と直接的關係のあるのは、前二〇〇〇年―一五〇〇頃にかけて東北方に向つたアラム移住群で

ある。彼等がバビロンの東方エラム近傍のキルまで進んだとき、そこには彼等より前にアラビアを出たアモリ・カナン移住群の一部が半土着の狀態にあつた。彼等の一部は前二〇〇〇年頃には舊來のバビロンに順應してしまつたが、一部はなほ遊牧狀態にあつた。そのうちにかのアブラハム族はあつたのである。(註)前述のアラム移住群は彼等を先驅として、徐々にメソポタミア、シリア、パレスチナ方面に進んで行つた。我々にとつて重要なのは、パレスチナに移住した者が尙ほ遊牧生活をつづけてゐたとの一事である。彼等がアラビアを出發して以來どれほどの年月が經過したかは正確には分明しないが、少くとも數世紀はたつてゐたであらう。しかし、その間彼等の生活樣式は殆んど變化してゐなかつたと見られる。卽ち彼等は依然として「矛盾の束」のまま、沙漠の子としてパレスチナ入りをなしたのである。

(註) 創世記に見えるアブラハム、イサク、ヤコブ等の所謂族長が單なる個人ではなくて、各〻その族長に引ひられる氏族であつたことは近代に至つて認められて來た。イスラエル民族構成要素としてのこれらの氏族の關係についてはここに觸れない。テル・エル・アマルナ出土のタブレットによつて證明された「ハビル」を「ヒブル」なりとし、イスラエルはヒブルの一部であつて兩者を同一ならずとする說についてもここには觸れない。

しかし、彼等はこの地に留ることいくばくもなくして、エジプトに向つて移動せざるを得なかつた。(二)由來エジプトの地は、チグリス・ユーフラト河畔と共に、その中間に住ふ遊牧民族の羨望の的であつた。彼等のエジプト移住は、同じ血につながるヒクソス王朝（前一八〇〇—一六〇〇）の末期であつた

と思はれる。エジプトに於て彼等の占據した地は、ゴセン或はラメセスの地と呼ばれたところで、ナイル河デルタの東側にあつた。彼等はここに於て半遊牧生活を營んだが、この生活樣式はエジプト人の好まぬものであつたため、(二)自然エジプト人との交渉は少く、從つてかの特殊な性格に變化を受けることも少なかつたと見ることができる。

然るに、ここに「ヨセフのことを知らざる新らしき王エジプトに起り」(三)彼等を壓迫したため、百年乃至百五十年の後には又復この地をも去らなければならなくなつた。彼等を壓迫したのは、おそらく第十八王朝のトトメス三世（前一五〇一―一四四七年）で出エジプトの行はれたのはその末期であつたと考へられる。出エジプトの原因は、半遊牧民たる彼等の生活樣式を無視した政策であつたと見られる。おそらくは沙漠の子が耐え難しと感じることが起つたのであらう。

（一）傳說によればイスラエル十二族全部がエジプトに下つたやうである（創世記四六ノ二八―三四J典、二―五E典、六―二七P典）。しかしその創世記さへもパレスチナ南部を營て離れたことのない氏族のあつたことを暗示してゐる（三八章）。更にイスラエル民族が十二族と數へられるやうになつたのは、これより遙か後代に屬する。

（二）創世記四六ノ三四。

（三）出エジプト記一ノ八。この句はイスラエルの親緣族ヒクソスが他の王朝にとつて代られたことを暗示する。

出エジプトの統率者はモーセである。出エジプトの人口總數は「女子の外に男六十萬人」(一)とあるが、これによれば女子と子供を加へると約三百萬人にのぼることとなる。しかし勿論これは不當で、狹いゴ

センの地の受容力はせいぜい一萬人と見られてゐる。故にペトリーの解決の如く、(二)約六千人と見るのが適當であらう。いづれにしても彼等は、數世紀の昔その祖先の見棄てたアラビア沙漠に再び戻つて來たのである。四十年間の沙漠の旅は實に困苦を極めたものであつたが、これは民族錬成時代であつた。シナイ及びカデシに於て、ヤハヱ禮拜の宗教と民族の統一とは成つたのである。アラビア沙漠こそ、彼等の民族史と宗教史の出發點であつた。しかし斯る成長發展にも拘らず、彼等生得の性格は變化を受けてゐない。寧ろそれは再び錬り直されたと謂へやう。この半世紀間の沙漠生活に於て、彼等は存分に野生をとり戻したのである。(三)

(一) 出エジプト記一二ノ三七。民數紀略一一ノ二一。

(二) Petrie: Egypt and Israel, p. 42 ff.

(三) 我々が既に見た「うなじこはき民」の稱は實にこの時代に起つたと見られてゐる。出エジプト記三二ノ九、三三ノ三。

イスラエル民族のカナン（パレスチナ）侵入は一般に前一四〇〇年頃とせられ、舊約聖書の記錄は十二族同時に一代にて征服を完了したとしてゐる。(一) しかしこの記錄は嚴密に言つて歴史的なものではない。既にのべたやうに、南部にはエジプトに移住することなくそのまま土着したものもあつたと見られる一方、北部に土着したものは漸く士師時代初期に侵入したものと見られるのである。

舊約聖書にはパレスチナ先住民について種々記されてゐるが、(二) 大體アモリ人とカナン人とが代表的な

ものとされてゐる。(三) アモリ人はアラム移住群に先んじてアラビアを出たアモリ・カナン移住群の一部であり、カナン人はアモリ人についてパレスチナに入つたものと考へられる。(四)

舊約聖書に於ては、彼等先住民の文化はイラエル民族のそれよりも低かつたやうになつてゐるが、事實はその逆であつた。彼等はメリポタミア、ナイルの文化の影響の下に相當高度の文化をもつてゐたが、當面の研究上最も重要なことは彼等が既に農耕生活を營んでゐた點である。

（一）ヨシュア記二一ノ四三―四五。

（二）創世記一五ノ一九、二〇。申命記七ノ一。出エジプト記三ノ一七。同一三ノ五。同二三ノ二八。創世記一三ノ七。事實はアモリ、カナン、ヘテ、ギルガシ、ヒビ、ペリジ、エブスなどであつたと思はれる。

（三）J典はカナン人と呼び（創世記一〇ノ一八、一二ノ六）E典はアモリ人と呼んでゐる（創世記四八ノ二二。民數紀一三ノ二九）。

（四）カナン人の名稱を先住民の總稱として用ひる場合もある。

農耕文化の民と雜居するやうになつて、彼等は多大の影響を受け、その生活樣式は一變するに至つた。本來彼等は遊牧民であつて農耕生活を嫌惡してゐたが、彼等より高文化先住民の豐富な生活を見ては、徐々に轉向せざるを得なかつた。パレスチナの地理から言へば、北部のガリラヤは農耕に適するが、南下するに從つて石地となり、ユダ地方では殆んどそれに不適當となつてゐる。事實南方に於ては、遙か後代まで牧畜のみが行はれたのである。かうして牧畜は終りまで行はれてはゐたが、全體的に言へば農耕民となつたのである。「乳と蜜の流るる地」といふベドウインの理想は、「凡ての人己が葡萄の樹と無

花果樹の下に坐す」とのフェラヒンの理想に變つたのである。

農耕に轉ずると共に先づ起つたのは、宗教上の變化である。彼等が農耕の技術を習得するには、それと同時に土着の神々の祭祀を習得しなければならなかつた。早期の資料は悉く、イスラエル民族が士師時代にはバールに仕へたといふに一致してゐる。(一) これは後代の豫言者たちによつても裏書きされてゐる。(二) 豫言者たちの努力によつてヤハヱ禮拜が勝利を獲得したときも、それは既に昔日の沙漠的性格を喪失してゐたのである。

(一) 士師記二ノ一〇、一三。三ノ五以下。

(二) たとへばホゼア書二ノ一六を見れば、その頃ヤハヱがバールと呼ばれてゐたことがわかる。

經濟生活上の變化もまた注意すべきものである。遊牧生活は共產的形態であり集團的生活であつて、その段階に於ては私的所有權は生じない。然るに孤立分散を必要とする農耕生活は、必然的に私的所有權を可能にするのである。更に孤立分散の結果としては、小人數の家族を單位とする社會の出發が可能となり、ここに社會生活上の變化が起つた。かかる生活は士師時代から王朝時代へ進むに從つて、次第に强化せられて行つたのである。

斯る民族的大變革と共に、彼等の特殊な性格も一變したであらうか。我々は否と答へざるを得ない。成程沙漠の子は田園の子とはなつた。しかし「矛盾の束」は依然として「矛盾の束」であつたのみか、

發展し行く經濟生活によつて矛盾は益〻大きくなり、「不可敎化的」性格は凡ゆる方面に露頭するに至つた。それが最も著しく現はれたのは經濟的方面に於てであつた。

王朝時代に至つては商業は相當發達し、古代世界に行はれた殆んどすべての技術がイスラエル民族のものとなつた。(一) そしてこれらの商業と產業とを通じて、國は大いに富みさかへるに至つた。(二) かかる時にあたつて、不法な手段によつて個人の富を增加しようとする者の現はれるのは凡ゆる民族に共通な現象ではあるが、彼等に於ては特にそれが辛辣であつて、全く「骨までしやぶる」ユダヤ的商魂を既に前八世紀頃以來養つてゐるのである。(三) ユダヤ的搾取の淵源するところは遠いと謂はねばならぬ。かかる富の不正獲得は卽ち富の不均等分配であつた。巨富を蓄積した者の下に於て、大部分の民衆は沙漠の生活にも見られぬ刻苦の生活をなさねばならなかつたのである。(四)

(一) 鍛冶、鑄物師、金銀細工人、石工、寶石彫刻者、大工、彫刻家、陶器師、畫家、織布工、漂白工、パン燒人、料理人、理髮師、香料製造人、藥劑師、醫師等が聖書には見えてゐる。

(二) 刑王紀上一〇ノ二七には「エルサレムに於ては銀を石の如くになし」とあり、ホゼア書一二ノ八には「誠にわれは富める者となれり、我は身に財寶をえたり」とあり、イザヤ書二ノ七には「かれらの國には黃金、白銀みちて財寶の數かぎりなし」とある。

(三) 舊約聖書にはこれらの例が夥しく見られる。以下に記すものは他民族にも共通するものではあるが、イスラエル民族に關するものが今から三〇〇〇年の昔に發してゐる點に注意を要する。

不正な度量衡（アモス書八ノ五。ホゼア書一二ノ七。ミカ書二ノ六）商業取引に於ける欺瞞（ミカ書六ノ一―）粗悪な商品販賣（アモス書八ノ六）穀物買占め（アモス書八ノ四―）過大な金利（アモス書二ノ八、五ノ一一。エゼキエル一八ノ八、一三、一七。二二ノ一二）債務者を奴隷とす（列王紀下四ノ一。アモス書二ノ六。八ノ六）僞筆（イザヤ書一〇ノ一―。エレミア記八ノ八）苛税（列王紀上四ノ七―一九。サムエル前書八ノ一五、一七。アモス書五ノ一一、七ノ一）貿易獨占（列王紀上九ノ二六―二八）强制勞役（列王紀上九ノ二〇―と五ノ一三とを比較。一二ノ一―二〇。サムエル前書八ノ一一―一八）收賄（アモス書五ノ一二。イザヤ書五ノ二三。ミカ書三ノ一二、七ノ三）等。

（四）富者及び貴族が如何なる無反省な奢侈の日を送つたかについては一一證句を擧げるに暇なきほどである。一例としてアモス書六ノ一―六を見よ。また貧者に對する壓迫についても一一證句を擧げないが、資本家の過度の穀物輸出のため屢〻飢饉が起り、通貨膨脹の結果としては貨幣の購買價値は著しく低下した。たとへば士師時代には祭司の年俸は十シケル（約十二圓）であつたが（士師記一七ノ一〇）アハブの治世には食糧の豐富な時に於てすら麥粉一セア（約十三リットル）が一シケル（約一圓二十錢）もしたものである（列王紀下七ノ一）。貧者は餘儀なく返濟不可能と知りつつ資本家の高利金を借り、その結果は奴隷とされた。北朝に於て屢〻革命の繰返されたのは、この社會的不安の證據である。

かくの如き矛盾を含んだ社會生活に對し、當然起るべくして起つたのが、遊牧的理想に立つ原始的・共產主義的解決である。それはイスラエル民族と共にパレスチナに入つたケニ人、レカブ人、及びイスラエル人の一宗派ナザレ人たちにより實踐提案され[二]、初期の豫言者たちも同一の理論を把持してゐたやうである。[三]しかし既に個人主義は深く根をおろし、遊牧的理想の行はれるためには社會は餘りにも複雜となつてゐた。[三]かかる社會的矛盾と思想的對立とを孕んだまま、彼等はやがてバビロン虜囚といふ大破

局に直面せざるを得なかつたのである。

（一）ケニ人はシナイに於てイスラエル人より早くヤハエ禮拜を行つてゐた者。レカブ人はその一分派である。共に遊牧的理想を堅持し、ヤハエに對して絶對忠誠を致し、あらゆるカナン的なるものを排撃した。ナザレ人は前二者と同じ理想を抱き、葡萄酒をすら飲まず、頭髪をのばした。前者は沙漠のものでなく、後者は沙漠の慣習だからである。かくの如き徹底した理想主義者は多くはなかつたであらうが、それに同情する者は決して少くなかつた。

（二）アモス以前の豫言者たちは右のものと同一の理論をもつてゐたやうである。「バールを倒せ、而して荒野の神ヤハエに歸れ」といふのが彼等のスローガンであつた。彼等は遊牧的理想をもつて（列王紀上一七ノ一、一九ノ一―一三。同下一ノ八。ゼカリア書一三ノ四―）原始的共産主義實踐團體の間に住んでゐたのである。

（三）祭司たちは遊牧的理想に同情を有せずして、個人主義的資本主義的組織の矛盾解決のため律法を制定した。智者も同樣な態度を有し、教育を以て社會的矛盾の解決方法となした。豫言者たちは前二者に比して同情的ではあつたが、解決は聖なる神の個人的經驗にありとした。

バビロン虜囚はユダ王國の最後的滅亡であつた。エレミアの豫言も「うなじこはき」民の受けるところとはならず、前五八六年（ゼデキア王の一一年）彼の豫言の如くエルサレムはバビロン軍のため陷落した。二ケ年間の籠城が如何に悲慘なものであつたかは、「わが民の女のほろぶる時には情愛ふかき婦女さへも手づから己の子等を煮て食となせり。」[一]との句によつて知られるであらう。バビロン軍の破壞と掠奪は徹底的で、民の有力者は殆んど虜囚となり、[二]「殘れる者は國の民の賤しき者のみ」であつた。眞に「根こそぎ」にされたと謂ふも過言ではない。

（一）エレミア哀歌四ノ一〇。

（二）虜囚は三回によつて行はれた。第一回は五九七年、第二回はエルサレム陥落と同時卽ち五八六年、第三回は五八一年である。虜囚の數はエレミア記五二ノ二八―三〇によれば三回を通じて五千人位であつた（列王紀略下二四ノ一四―一六の數には誇張があると見られる）。これは成年男子のみの數であるから、婦人と子供を加へればこの十倍にはのぼつたであらう。當時のユダ王國人口の二割五分にあたると考へられる。

虜囚はバビロンのケバル河畔のテラビブ、テルメラ、テルハレサ、アハワ、カシピア等の分散せしめられた（エゼキエル書一ノ一―三、三ノ一五。エズラ書二ノ五九、八ノ一五―一七）。バビロンに於ける彼等の悲痛な氣持は有名な詩篇一三七につきてゐる。しかし實際生活の苦痛はさほどではなく、すぐれた政治家であつたネブカドネザルは彼等に自治を許し、驚くほどの自由を與へた（エゼキエル書一四ノ一、二〇ノ一。エレミア記二九ノ五―七。エズラ書二ノ六四―六九）。

凡ゆるユダヤ的なるものは虜囚時代にはじまると謂はれてゐる。事實この時以來イスラエル人はユダヤ人と呼ばれ、宗敎はユダヤ敎と呼ばれるやうになる。たしかに彼等のもつ特殊な性格は、ここに新しき表現を得たのである。

前述の如く、農耕カナン人との雜居の結果、彼等の特殊な性格は經濟的な方面に新らしい表現を得たのであるが、虜囚時代には宗敎的方面に現はれたのである。先づ彼等が神殿を失つた點に注意せねばならぬ。虜囚前の宗敎は、ヤハヱへの供犧を中心とする神殿宗敎であつた。今それを失ひ、かつ遠國に移されたとすれば、宗敎上の根本的變化は必至であらう。神殿を離れて執行し得る儀典として、彼等は「割禮」「安息日嚴守」「シナゴグに於ける禮拜」を選んだ。そして豫言者の說いた良心主義的自由主義

的宗教を廢して、頑固極る律法宗教たるユダヤ教を起したのである。

（註）メソポタミア大平原やチグリス・ユーフラト河畔の沃地はユダヤの荒地とは比較にはならず、凡ゆる産業や文化はユダヤ人の驚異であつた。彼等がこの地に於てその商魂にみがきをかけたのは言ふまでもない。

ペルヤが新バビロンを滅亡せしめた翌年、即ち前五三七年クロス王はユダヤ人の歸還を許した(一)。彼等は先づ豫言者ハガイ、ゼカリアに勵されて、約半世紀間破壞のまま放置された神殿を修築し(二)、次でエズラやネヘミアの律法運動が起つた(三)。この頃から豫言者の活動は漸く衰へ、宗教上の實權は祭司の手に移るに至つた。祭司は後代まで神殿禮拜に於ける樞要人物ではあつたが、やがて實權は律法學者即ちラビの掌握するところとなり、ユダヤ教の「異質的」性格は漸く露頭するに至つた。學者といへば直ちにパリサイの事が聯想される。ユダヤ教は正に病的宗教となりつつあつたのである。

（一）ユダヤ人はゼルバベルと祭司ヨシユアにともなはれて歸還したが、大多數の富める人々は尙ほバビロンに殘留した。その後三十五年を經てエズラに伴はれて多くの者が歸還したが、尙ほ殘留して遂にヂアスポラとなつた者も少くなかつた。事實バビロンはその後北方に於けるユダヤ人の生活の中心地となり、「ミシユナ」の出た頃は人口百萬に達したと謂はれてゐる。バビロニア學派はパレスチナ學派の亡んだ遙か後までも盛んで、遂にはバビロニア・タルムードの完成を見たのである。

（二）第二神殿は前五一六年大なる歡喜のうちに落成した（エズラ書六ノ一五）。ソロモンの建てた第一神殿に比して見劣りのするものであつた。この修築に際してサマリア人が協力を申込んで來たが、彼等は既に雜種となつてゐたため、ユダヤ人はこれを拒絶して立場を明らかにした。

（三）歸還ユダヤ人の雜婚が貴族や祭司にまで及んでゐるのを知り、エズラは斷呼離婚を要求し、從はぬ者を追放した（エズラ書九

ノ一―四、一〇ノ一―四四)。「土地の民」及びサマリア人は、かくて異邦人と見做され、兩者の反目は基督時代までも續いてゐた。ともあれこの事實は彼等の民族意識の高揚を示すものである。

紀元七十年、卽ちエルサレム陷落前の半世紀に於て最も活潑な律法的活動をなした者はパリサイ人であつた。(一) 彼等の最も特色ある敎說は、所謂「口述律法(ハラーコース)」に關聯してゐる。これは後に、ユダヤ精神文化の華であるタルムードに發達したもので、トーラーの解釋である。彼等はトーラーを、生活の凡ゆる方面を支配する詳細なる規則に發展せしめたのである。これは實に病的とも謂はれるほど煩雜なもので、民衆はこれの遵奉を强要されたが、所詮到達し得られぬ德の標準たるに過ぎなかつた。(二) 彼等のため最も甚しく妨害を受けたのは、基督自身であつた。基督もまた痛烈に彼等を反撥攻擊した。「禍害(わざはひ)なるかな、僞善なる學者、パリサイ人よ、汝等は白く塗りたる墓に似たり。」「なんぢらは人の前に天國を閉して、自ら入らず、入らんとする人の入るをも許さぬなり。」(三) 評し得て餘りある言葉である。我々はここに「異質的」の最も著しきものを見るのである。

(一) パリサイの語根は PRS であつて、「分離主義者」「分たれたるもの」の意味は二つながら支持せられてゐる。潔からぬものを潔きものとを區別せんとする努力、自らを分離せんとする努力がこの名を與へたものであらう。彼等の起源は古くマカベア家の頃にある。ヨセフスはパリサイをエッセネとサドカイの中間に置てゐる (Ant. XVIII, 1_3, BJ. II, 8_{14})。新時代の事實上の精神的持導者であつた。

(二) 民衆は「なすべし」「なすべからず」の誡命各數百によつて縛られてゐた。未開社會の最も悲慘なタブーと雖もこれほどではなく

ない。

一二の例を擧げて見れば、安息日には約十四丁以上歩いてはならなかつた。敵にこの誡命を逆用されて滅亡したことは一再ではない。安息日には絶對勞禁止である。頭に針をさしたまま歩くことも勞働と認められた。故に過誤を冒さぬため、婦人は前夜は針仕事をつゝしんだ。出先きで空腹を覺へた場合には他人の麥畑の麥を食ふことは許されたが、安息日には不可とされた。手掌の中で麥の粃をもむことは勞働だから。基督の弟子たちはこれで問題を起したことがある。

(三)　マタイ傳二三ノ二九。二三ノ一三。特にマタイ傳第二十三章全體を見よ。

我々はここに律法の本質について論じようとするものではない。しかし律法の問題について最も苦勞を重ね、ロマ書やガラテヤ書に於て明確な解釋を與へた使徒パウロの所說を瞥見するのは有益であらう。

パウロの律法哲學を簡敍することは甚だしい冒險であるが、幸にロマ書七ノ七―二五にはその中心が示されてゐる。彼によれば律法も誡命も聖にして善である。しかるに、彼によつて生ける惡魔的勢力と考へられてゐる罪は、却つて律法や誡命を利用して活動するのである。「然れど罪は機に乘じ誡命によりて各樣の慳貪を我がうちに起せり、律法なくば罪は死になるものなり。」と彼は言つてゐる。何等かの律法或は誡命の來るときは、これに從ふか否かの問題が起り、それに對する失敗が起り、ここに罪は生きて來るのである。「誡命きたりし時に罪は生き、我は死にたり。」とある通りである。これはおそらく彼自身の經驗であらうが、最も深い哲理である。「而して我は生命にいたるべき誡命の反つて死に到

らしむるを見出せり。これ罪は機に乘じ誡命によりて我を欺き、かつ之によりて我を殺せり。」と彼は言つてゐる。ヤハヱの嘉認（ratzôn）を受ける唯一の道であるとユダヤ人の考へた律法宗教は、斯くて死に至る道に外ならなかつたのである。ユダヤ人は所詮無益な努力を繰返しつつ、その性格を彌が上にも變質的なものとなしつつあつたのである。

福音書を讀む者は、基督在世當時のユダヤ人が如何に「不可敎化的」「異質的」であつたかを明らかに知ることができる。基督も十二弟子も、全く手のつけやうもなかつたのである。

紀元一三五年の最後的國土喪失と共に、彼等の世界離散は本格的となり、經濟的方面にも宗教的方面にも上述の問題をもちつつ、永遠の漂泊の旅は始まつたのである。彼等の性格は到る處に於て紛爭の種となり、凡ゆる國民の侮蔑と擯斥とを買つてゐる。セファルディーもアシケナージー(註)もこの點に於て選ぶところはない。自分の體臭は當人にはわからぬが、他人にとつては耐え難く厭はしいものである。ユダヤ人問題は結局體臭の問題である。

（註）これは全世界のユダヤ人を二つに大別する名稱である。セファルディーは「スペイン人」の意で、「スペイン系人」を指す。セファルディーの語源は Sepharad であるが、古來スペインを指すものとユダヤ人學者は解釋してゐる。第十五世紀にスペインから追放され、英、佛、蘭、葡、上、伊等に分散定着するに至つたものを指すヒブル語である。

アシケナージーは Ashkenaz から出た名稱であるが、アシケナズはゴメルの長子とある（創世記一〇ノ三、歷史志上一ノ六）。アシケナズの民族的位置については問題があるが、中世以降のユダヤ人の或る學者はチュートン人を指すものと考へて

ゐる。かくてアシケナージーはドイツ系ユダヤ人の名稱となつた。

世界離散のユダヤ人の基地は、少くとも國土喪失後に於ては、スペインとドイツとであつた。ローマの眼をのがれるために は海路スペインへ行くか、ダニューブ河を溯行して南ドイツに達し、ラインによつて北上する以外に道はなかつたであらう。

以上に於て我々は、極めて簡單乍ら、反ユダヤ主義の理論の根據となるべきユダヤ人の特殊性格を歴史的に檢討して見た。沙漠の「矛盾の束」としてアラビアを出た彼等は、やがてバビロンに、そしてパレスチナに、更にエジプトに、再びアラビア沙漠にと漂泊の旅をつづけ、遂に又パレスチナに入つたが、沙漠の子はその性格を變へてはゐなかつた。然るに彼等はこの地に於て生活樣式を一變し、遊牧生活を棄てて農耕生活に入つた。經濟的條件も社會的條件も全く別個のものとなつた。しかしその民族的性格に變化はなく、單純な生活樣式から複雜な生活樣式に移つただけに、その性格から來るものは極めて怖るべきものであつた。それは深刻な經濟的問題で、後にユダヤ的商魂として擯斥されるに至つたものは、既にこの時代に見られる。かかる矛盾をもちつつ、國民はバビロンに虜囚となつたが、この時以來特殊的性格は宗教的方面に現はれ、殆んど病的と考へられるユダヤ教を發展せしめることとなつた。國土喪失によつて全く世界離散の民となつた彼等が、かかる性格をそこに棄てて行かなかつたのは勿論のことである。沙漠の遊牧生活は、謂はば國なき生活である。彼等は今また國なき生活に入るにあたり、民族的記憶をその心のうちに甦がへらしめたのである。ヨーロッパもアメリカも、彼等はアラビア沙漠の記

憶に於て見たのである。

或は資本主義的、或は共産主義的、或は虚無主義的、等と擧げられる數多の擯斥すべき性向は、すべて沙漠以來培はれて來たところの、謂はば先天的な「不可敎化的」「異質的」性格の變形發展に外ならぬ。ユダヤ人を研究する場合に先づとり上ぐべきは、既に彼等の血となり體臭となりきつてゐる性格であつて、その近代的所産ではない。

約束の地は與へられるか、永遠の漂泊が運命か、シオン主義運動の前途果して如何。唯ひとつ明らかにして變らざるものは、その性格であらう。（一八・一・一九）